

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 自惚れ : 小説 |
| Author(s) | 後藤, 壽夫 |
| Citation | 龍南, 178 : 17 - 28 |
| Issue date | 1921-07-10 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/7786 |
| Right | |

白 惚 れ

後 藤 壽 夫

雨雲が、空のおもてで延びたり縮んだりして居るその下で、湯氣のやうな風が、不揃ひな足なみで動いて居る日だつた。

午前十一時三十分の汽車で、高等學校に入つて居る兄が、春休みで歸つて來る筈になつて居たので、日曜を幸ひ妹を伴れて、停車場迄出迎へることにした。

家を出たのが、少し遅れ目だつたので、私達が、改札口の木柵に手をかけると、飛び込むやうにして汽車が止つた。混雜する旅客の間から、餘程注意して、それらしい姿を求めただけれども、どうしたわけか必ず降る筈の兄が見つからなかつた。

こんな風に、待ちぼうけを喰はされた時に、きまつたやうに感じる、腹立しい淋しさに、少し氣を悪くしながら、妹の方を振りかへると、妹は、その時改札口を出ようとして居た十七ばかりの女學生に頭を叩き居た。

私は、その女の前齒に光つた金は見逃さなかつたけれども、ふと投げた視線の彼方に、

見出して、思はず聲を發した。

『あゝ、お歸り!』

『おや、お迎へ?、君の兄さんもこの車に乗つてたがネ。どこか途中ででも遊んで居るのではないか知ら。』
彼は、調子よくこう答へながら、差出した私の手を取つた。

兄の姿が見えないのに、少し氣を悪くして居た際なので、一寸救はれたと言つたやうな氣持から、強くその手を振りながら、彼の高等學校の制服と、肩の白ヅツクの雜囊とを眺めた。彼は中學で、私より一級上に居た、今はK市の學校に居る男だつたが、私とは、中學の文藝部などの關係で、可成親しかつた。

改札口を出ると、彼は私の方に、おちつきのない足取りで近づいて來たが、私と肩もならべないうちに、
『君、あの女を知らないか?』

と、性急に、金ボタンの光る袖をあげた。私は、その唐突さに驚きながら、指さす方に眼をやると、おりからおち始めた小さな雨を、一つの傘の下にさけながら、二人の女學生が、小さくよりそつて立つて居るのが見えた。

『知らないよ。どうかしたのかい?』

『知らない?! あゝ貴女知つて居るでせう。』

彼は面喰つて立つて居る私の妹の方へ聲をかけた。

『ホラ、あの右の方に居る人。』

右に居るのは、さつき妹が挨拶して居た女だつた。

『あのお方は、B町の……』

『山村つて言ひませんか？』

『エ、山村ふち子さん——四年生のお方ですワ』

『やつぱりさうだ。有難う。』

私が聲をかけたのにも答へず、彼はそのまゝ歩き出した。そして二三步行つて、ふりかへつて、

『君、今日は失敬するよ。また何時かネ。』

と、言ひすて、二人の女の方へ、大股で近づいて行つた。私は、その後姿を見て居るうちに、わけもなく自分のことのやうに恥しくなつて、妹をうながしながら、家の方へ續いた横町にそれた。彼が、女達に話しかけるのは、はつきり認めたが……。

そのことがあつて、二日目の午後、彼が、ひよつこり、私の部屋にやつて來た。白線の入つた帽子を、習慣からか、脱ぎもせずに、火鉢をだいて、煙草をふかして居たが、

『どうだい、學校の方は？』と切り出した私の間を受けて、可成雄辯な「學校の話」を始めた。

『さうさう。入學した當坐——寮に入つてから、一週間目ころだつたらう。こんな手紙を書いたことを覺て居る。』

……寮は面白い——その、解放と自由は、俺達中學から來たものには、狂喜以上の驚異だ。學校の總ては

「つまり、始めのうちは、新しく珍しく、そして、自からの努力の賜だつたが故に、總てが面白かつたのだ。ネじめじめした古井戸から、輝く春の草原の上へ掬ひ出された青蛙のやうに、はねまわつたのだ。いかにも紳士的な彌次の飛ぶ、演説會などで、玉蜀黍のやうな髪をした、上級生の思想家達から、

「諸君！我々の眞摯なる内的生活——個性發見の努力の前には、社會もなく、國家もない。學校などの存在せぬことは、もとより論をまたないのである。」などと、たきつけられると、もう自分一人のことのやうに嬉しくて、習ひかけた獨逸語の教科書なんか、古本屋へもごしても好いと眞面目に思つたよ。

『それでも、夕闇が、寮の裏手の雜木山を青い硝子鐘の中へ入れやうとする頃になると、日記の中で、「佛蘭西の田舎にありさうな」と形容した、山へ通する白い道の上を、深見——知つて居るだろう、僕と一所に入つたB町の男、——などと、小唄を口ずさみながら可成感傷的な散歩をしたものだ。深見にはB町に戀人があつてネ。その甘き話を聞かされながら、お互ひに、無暗に感激して見たりした。

『そのうちに、日記にこんなことが書かれる時が來た。

——俺には寮が苦しくなつた。

何と言ふ、心と心とのかち合ひなのだらう。若い秀才達——同じやうな野心と、同じやうな自尊心に、世を一色の紅に燃やさうとする若い男達の集り、そのいらいらしい睨み合ひの状態が、俺には苦しくなつた。

俺は寮生達の、「感激」なるもの、「友情」なるもの、單なるごまかしにすぎないことを知る。徒らな感激と徒らな友情との裏では、各々の自我が、「だが、僕は君より偉いんだぜ」と、空虚な笑ひ聲をたてる。

俺はその寂寥にたへられない。俺の周圍には總ての愛が居ない。母も姉も、戀人も……。

此のひからびた寂寥の中で、何故酒を惡魔と呼ばなくてはならないだらうか。煙草に、冷い眼を投げなくてはならないだらうか。――

『今から考へて見れば、つまり、自分が弱いからなのだがネ。その時は無茶に淋しかったのだ。どこかで、この乾いた喉をうるほしたい――随つて戀と言ふことなどには、すこぶる心を引かれた。こんなことのあつたのを覺えて居る。』

『秋の去る頃、一日中、不思議に魅力の強い。細い雨が落ちて、日が暮れて、それが霧になつた夜だつた。蜜の味をまだ知らぬ小蜂が、咲きはこつた大輪の花の底を、盗みうかがふやうな氣持から、何時ものやうに、深見の部屋に出かけて、こちらから求めて、彼の、ろけの放つ芳香に酔はうとしたことがあつた。その夜は奇妙に美しい晩で、日本繪具の糊粉を溶いたやうな霧の中で、向ふ側の寮の窓が、童話のやうな橙色に輝いて、中庭の立木の影が、軟かくぼけて居た。』

『窓にもたれながら、深見の話に耳をすまして、中學時代の、片戀の相手の、切れの長い眼などを思ひ出して居た時（深見の戀人とその女とは、同級生だつたからネ）深見が机の抽出しから、水色の封筒を出して、言つた。』

「こんな女があるぜ。手紙を出して見ないかい。僕のあれの親友で面白い女だ。綺麗ではないけれど。」

『僕の眼は、その封筒の、あまり上手でもない女文字から、しばらく離れなかつた。こんな折りのこんな事件は、可成、心を動かすものだ。』

『つまり、始めは、夢のやうに、美しく面白かつた龍宮も、やつぱり水の底だつたのだネ――その冷たさが

いつの間にか、たわがたくなると言つたわけだ。而も、此の龍宮は乙姫拔きの龍宮と来て居るんだもの。乙姫代理に酒を任命したのは苦肉の策だとして、そのうちに試験も来ようさ。玉手箱が、見事にわれてしまつたら、残るのは煙よりもはかない幻滅位なものだらう。

白くなつた煙草の灰が静かにおちた。

『そんなものかい、高等學校つて。違ふだらう。僕はきつと、もつと、ごうかして居ると思ふがネ。』と、私は口を入れた。

『ウン、もつと、ごうかして居る。教授つて言ふ奴が澤山居るよ。皆、驢馬のやうに高慢で、鹿のやうにいつんどして居る。そして、教壇に上ると、肺病のカメレオンのやうな聲で講義を始める。生徒がそれに負けないうことは無論で、髪や、鬚で塵のお休み所を作つて、乞食の國の古衣屋からもつて来たやうな服を着て、酒でも飲めば、剛毅朴訥仁に近いのだ。』感激』や、『泣血』などは、何時でも、煙草の滓と一緒にポケットにもちあはせて居る。』

『無茶だ、嫌な罵倒のしかたをするではないか。僕は至つて弱い男ですが、高等學校に壓倒されてしまつたので、腹いせに罵倒しますつて言ふやうな調子じゃないか。卑怯だよそれは。』

私は、つい反感を起してこう言つた。

『フン。馬鹿に、道徳家ぶつたネ。つまらない偽善はやめた方が好い。』

私は、怒らせてはいけなと思つたので、すぐ話頭を轉じた。

『だが、あまり白つばくれさせないせ。そら、あの女はどうしたんだい。驛の前でさ——山村ふち子さ

んだとか言つてたネ。』

『何でもないさ。』

『さうでもなさうだぜ。』

『何でもないさ。話せつてば、話しても差支へはない——何んでもないことだ。』

彼は又始めた。

『夜乗つても、晝乗つても、伴れがあつても、なくつても、退屈で苦しいのは汽車の旅だ。列車の、あはたしい、粗っぽい振動につれて、自分の身体も、床を通して、レールの間に溶け崩れて行くのではないかと思はれるやうな幾時間を、その日、僕は夜行の三等車の隅ですごした。』

『起きて居るのか、眠つて居るのかわからない、重苦しい時が、幾つかすぎた後、夜のあけそめて行くけはひを、硝子窓の外に感じながら、今日、H驛に出迎へて呉れる筈になつて居た女のことを考へて居た。女と言ふのは(さつきも一寸口に出したが)深見の見せた、青い封筒の主で、彼の紹介で、友達になつたのだが、その日僕の歸省を、H驛に迎へたいと、手紙に書いて來てあつたのだつた。』

『若い女と男とを列ぶれば、すぐ戀だとか何だとか言ひたがるのが世間だが、戀つてそんなにお手輕になりたつものではないのがほんだと思ふよ。僕の場合も、交りを始めた動機が、たゞ、偶然に握んだ藁だつたので、戀なんか言ふ感じは、ほとんど持つては居なかつた。まるでなかつたとは言はないが。それでも、對手が異性であることや、手紙の上では、可成面白さうな女に思はれたことや、始めて會ふのだと言ふことなどが、或る期待——どんな期待だつたか、僕自身もはつきり言へないが、丁度、珍しい芝居の幕あきを待つ

て居る時のやうな、眞面目よりも好奇心のかつた、期待をいだかせたのだつた。その女が美しくないと言ふことは知つて居たのだが、その時は少しも氣にかゝらなかつた。

『B町(B町の次が、H驛で、その次が此のO市だネ)に汽車が止つた時、今迄黒いお神さんや、縞ももひきの行商人や、カラの黄色な紳士達ばかりしか居なかつた僕の車室に小さな、可愛い、女學生が入つて來た。O市の女學校のマークの入つた袴をはいて、本の包みらしい風呂敷を大切さうにかゝて居るのは、土曜日をB町の友達の家か何かで暮した、その歸りらしく思はれた。が、僕はH驛が近づいたので、その方に氣をとられて、僕の斜め前に席をしめたその女の方には別に注意もはらはなかつた。』

『B驛から、H驛までは、五分間ばかりで行けるのだつたが、その間に僕は、さつきの女——簡單に可愛い、と言つたらそれですむやうな、下ぶくれの頬と、少しゆるみのあると言つたやうな靜かな眉をもつた、少女だが、それが、僕に、可笑しな素振りをするに氣がついた。可笑しなと言つても、決して、エロティックなところがあるわけでもなく、唯時々、僕の方に、子供っぽい惡戯さうな流し眼をくれては、下を向いて、さもおさへきれぬと言つたやうに、こみあげて來るらしい笑を噛むのだつた。その笑ひ方などから推して見ると、無條件に自惚れる先に、その女は、ごかして私を知つて居るに違ひないと思へた。ふと、どうしたわけだつたか、深見の戀人ではないだらうかと思つて見たのが、その女が、B町から、O市へ歸つて居るのだと先づ信じて居たので、そんな斷定も下せなかつた。また、僕としても、自分と同車した美しい未知の少女を友達の人だなど、輕卒に決めてしまひたくもなかつたので。』

『H驛に着いた時、動き出したブラットフォムの群集の中から、一人の女が、小走に僕の方のかけよつ

て、昇降口のところで、誰かと話し始めた。氣がつくと、昇降口にはさつきの女學生が居るのだつた。僕はその女を見た瞬間にてつきりそれだと思つて聲をかけようとしたのだが、昇降口で止つてしまつたので、間違ひかと思ひながら、ふと、その手にした傘に眼を注ぐと、青い蛇の目の漆の肌に、手紙の上でなじんだ名が赤く光つて居た。

『その女は、美しくなかつた。鳶色の固い顎や、首や、肩の恰構は女性よりも男性を思はせし、低い脊丈と、着物の黄色の勝つた縞模様などが、よけいに粗な感を與へるのだつた。』

『輕い程度の幻滅——大袈裟に失望とは言へない漠然とした苦しい氣持に包まれながら、僕は彼女を眺めたが、彼女が、さつきの女と知り合ひだと言ふことに注意を付けるひまも、僕の漠然とした苦しいものたりない感じのわけを探るひまもないうちに、汽車が動きさうなので、こちらの方から、彼女に聲をかけねばならなかつた。』

『輕い會話を二つ三つ交して居るうちに汽笛が鳴つて、彼女が動き出した。僕は惶て、帽子をとつた。』

『動き出した列車の中で、さつきの女學生は、また元の坐席に歸つて、例の惡戯らしい、忍び笑ひを始めたが、僕は、いらだたしさと、さまり惡さのてれかくしに、口笛をふいたり、輕い低聲で歌つて見たりして、窓にうつる、灰色の海を眺めて居た。』

『そのうちに、その女の美しいこと、且驛の女の美しくないこと、が、ふと結びついて、僕は何だから、自分の誇でも持つて行かれたやうな氣がしはじめた。不思議なもので美しい女が出て來たら、自分の知り合ひの女の美しくないことが氣にかゝり始めた。』

『と同時に、H驛の女を知つて居る女學生は、一体誰なのだらうと言ふ疑問が高まつて來た。O市へ歸ると見たのは、間違ひで、やつぱりB町の女かも知れない。B町の深見の戀人なら、彼と一緒に寫つた寫眞などで、僕の顔は知り得る筈である。注意して見ると、そのしのび笑ひする女の前齒には、金が光つて居て、齒の面と、金との境が、黒く汚れて居た。女學生で金齒を入れて居るところを見ると、戀人にもなり得る年らしいなど思つて居るうちに、深見の戀人が、FOXニフクキムと言う仇名をもつて居たことを思ひ出して、その女の口元を注意したが、強ひて狐と名をつけない程、尖つた口もして居なかつた。

『だけど、五分六分とたつうちに、始めから、H驛の女に悪い感情をもつて居たと言ふわけでもなかつたので、彼女の黒い印象も、次第にその影を薄くし始めた。それで、自然と、金齒の少女に對する詮索も止んで、彼女の流し眼を、或るエロイックな魅力さへ伴つたものとして、安易に味ふことが出來始めた。

『が、今話しかけたら、あの可愛い、金齒は、何と答へるだらうなどと、浮いた氣持にともすれば、ならうとする自分をじつとをさへつて、O市の驛が近づいたのを幸ひ、雜囊を棚から下して、車室を出た。

『空は灰色だつたけれども、その下のO市の瓦は、おちついた水色をたゝねて居た。故郷は、僕の心を、わけもなく喜ばせて、瞬間的に和ませた。金齒の少女も、H驛の女もすっかり忘れさせた。

『故郷！——疾驅する列車の鐵の手欄に依りかゝりながら、小聲でこゝろ言つた僕は、それが獨逸語であることによつて、僕の高等學校の生徒としての、第一の歸省と言ふ感じをはつきり表現したかつたのだつた。

『O市の驛で——そこで君に會つたのだが——改札口を出ようとして、僕は、驛の前の電柱の陰に、きれの長い眼と、短かくふくらんだあごを見た。その女の明るい眸は、一種の期待と懇願とを含んで、僕の方へ注

がれて居た（と僕には思へた）。その 短い聖母型のあごを、つゝましまやかに結んだ、しなは、僕には忘れられないものだつた。

『僕が、中學に居た時の、片戀の相手で。一度戀文まで書いたことのある女で岡たけ子と言つたが、僕は彼女の視線を感じた時に、何より先に、頬のほてりを覺わした。成熟した女が、彼女の頬に、髪に、胸にあつた。が、僕が彼女の視線に答へて好意ある微笑を送らうとした時に、意外な光景が、僕の微笑を奪つた。汽車の中の金齒の少女が、彼女に近づいて、私の方を顧みながら、ささやいて居るのだつた。』

『僕は、オヤツと思つた。そして、君の妹から、その女が、山村ふち子——深見の戀人さ——と聞いた時にうまくわなにかけられたなど思つた。僕の頭の中では、H驛の女が、醜いと言ふことと、彼女達が美しいと言ふことが、こんがらがつて渦を卷いた。』

『僕は思つた。たけ子は僕を戀して居たに違ひない。そして、僕がH驛の女と親しくして居ることを知つて復仇的に、今日のようなことをしたに違ひない、ふち子を僕の車にのせて、H驛の女と話すのを、すつかり見せた。そして自分はこの驛で待つて居る。』

『僕は腹がたつて來た。と同時に、小つぽけな女のくせに、こんなお芝居じみたことをするなんて、生意氣だ。そんなにお安すく馬鹿にされてたまるものか。僕には、汽車の中のふち子の笑ひまでが、嘲笑のそれに思はれて來た。そして、H驛の女は醜い——彼女達は綺麗だと思つた時に僕は、撲られたやうな氣がした。』

『このまゝ、だまつて歸つたら、僕のまけだ（負けなど言ふ氣持が、奇妙に湧き起つた）。問訊さなければと思つたので、そのまゝ君を後して、彼女達の方へ進んで行つた。だが、町の中で、美しい女と話して言ふや

うなことが、可成僕を引きつけたことは白狀しておく。あの時、君が横町にそれなかつたら、僕は一層得意だつたらうよ。』

こゝまで話すと、彼は豫定してあつたかの如く、ぽつりと話を切つた。五分ばかりも延びた、煙草の灰が白く光つた。

『馬鹿に思はせぶりな切り方をするじゃないかい。それからどうしたんだ。』

彼の話振りが、次第に冷くなつて、終りは自己嘲笑の影さへさして來たので、始めの、「何でもないさ」と言つた事などと思ひ合されたので、氣嫌をとるやうにこう言つた。

『言はなくつても、解つて居るだらう。聞いて見た結果は簡單さ。山村ふち子は、岡たけ子のところへ遊びに行つたことだし、戸驛の女とは、偶然話したのさ。總べてが偶然の集りだつたのに、たゞ僕の自惚れが、ひとりよがりの創作をやつたにすぎないのだ。』

煙草の灰が音もなく落ちた。

——(終)——